

[研究ノート]

マレー語教科書における人称代名詞と代名詞代用表現

Personal pronouns and pronoun substitutes in Malay textbooks

野元 裕樹

Hiroki Nomoto

東京外国語大学

Tokyo University of Foreign Studies (3-11-1, Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo 183-8534, Japan)

要旨：マレー語学習において、話し手・聞き手を指示する表現の習得は、決して入門段階にとどまらない。これは、人称代名詞だけでなく、固有名、親族名称、敬称なども代名詞代用表現として用いられるためである。本稿では、既存のマレー語教科書において人称代名詞・代名詞代用表現がどのように扱われているかを論じる。

Abstract: The acquisition of speaker- and addressee-referring expressions in Malay is by no means an elementary matter. This is because they consist not only of personal pronouns but also of pronoun substitutes such as proper names, kinship terms and titles. This article discusses how personal pronouns and pronoun substitutes are treated in existing Malay textbooks.

キーワード：マレー語、人称代名詞、代名詞代用表現、教科書分析、誤用分析

Keywords: Malay, personal pronouns, pronoun substitutes, textbook analysis, error analysis

1. はじめに

本科研課題が対象とするアジア諸語はいずれも、話し手・聞き手を指示する人称代名詞が複数存在するだけでなく、さらに親族名称なども代名詞代用表現 (pronoun substitutes) として用いられるような言語である。具体的には、日本語、朝鮮語、インドネシア語、マレーシア語 (マレー語)、タイ語、ラオス語 (ラオ語)、ベトナム語、カンボジア語 (クメール語)、ビルマ語である¹。Helmbrecht (2013)がまとめているように、印欧語の多くは親疎によって異なる2つの二人称代名詞を持つ。いわゆる T/V distinction である (仏 tu/vous、露 ty/vy)。しかし、上記の言語では人称代名詞の数は2つより多く、二人称以外の代名詞にも複数の形式が存在する。代名詞代用表現は、ほとんどの言語に存在する。しかし、上記の言語では、その使用は幼児語 (例: mummy) やごく一部の使用域 (例: 学術領域における the author) に限定されない。

このような言語では、話し手・聞き手について述べることは実はかなり難しいことになる。I/my/me, you/your という形式を覚えて終わりではない。相当数の形式を覚え、さらにそれぞれを話し手・聞き手の特性や状況、文体などに応じて使い分けられるようにならなければならない。さらに、いわゆる主語・目的語の省略 (専門的には pro 脱落と呼ばれる) も存在する。従って、基本的な表現の適切な使い分けは、上級から超級レベルの事項と言えよう。

本稿では、まずマレー語の聞き手指示表現の誤用例を検討する (第2節)。その後、話し手・聞き手指示の表現が既存のマレー語教材でどのように扱われているかをまとめる (第3節)。

¹ 野元他 (予定) では、日本語、朝鮮語、インドネシア語、マレー語、タイ語、ビルマ語とジャワ語の代名詞代用・呼びかけ表現の先行研究を通言語的視点から整理し、批判的に検討している。

2. 聞き手指示表現の誤用例

本節では、聞き手指示表現の誤用例として、定期試験における学生の解答を取り上げる。具体的には、東京外国語大学で筆者が担当するマレー語文法の授業の1年次最後の試験である。この試験では、学生達が1年間マレー語会話の授業などでお世話になってきたファリダ先生へのお礼の手紙を書くことをボーナス問題として出題した。履修者17名中8名がこの問題に解答した。8名中1名の解答には、手紙の読み手であるファリダ先生を指示する表現が含まれなかった。別の1名はファリダ先生宛ての手紙ではなく、別の宛ての手紙の中でファリダ先生に言及していた。よって、6名の解答が考察対象である。以下、用語の一貫性のために、読み手を「聞き手」に置き換えることにする。

聞き手を適切に表現できたのは6名中1名のみであった。

学生 A の解答（抜粋）

Selamat tengah hari, Puan Faridah. Saya hendak mengucapkan terima kasih kepada **puan**.

ファリダ先生、こんにちは。先生にお礼申し上げます。

1文目の Puan Faridah「ファリダ先生」は呼びかけである。呼びかけを間違える学生はいない。問題となるのは2文目最後の **puan**「先生」である。マレー語では、聞き手が大学教員の場合、英語の **you** に相当する人称代名詞を使うのは不適切である。その代わりに、大学教員の職階、最終学位、性別、婚姻状況に応じた代名詞代用表現を用いる。教授の職階の場合には **prof.**、教授でなく博士号がある場合には **Dr.**、博士号がない場合には男性が **encik**、既婚女性が **puan**、未婚女性が **cik** となる。ファリダ先生は准教授、博士号なし、既婚女性なので、**puan** を選択するのが適切である。

学生 B の解答（抜粋）

Puan Faridah yang saya hormati,

Saya ingin mengucapkan ribuan terima kasih kepada **Puan** yang mengajar bahasa Melayu selama setahun.

尊敬するファリダ先生、

1年間マレー語を教えて下さった先生に大変感謝しております。

学生 B の選択は間違っていないものの、綴り方が間違っている。代名詞代用表現としての **puan** は小文字で始める。大文字で始める **Puan** もある。それは、1行目の Puan Faridah の Puan のように、敬称として用いる場合である。代名詞代用表現と敬称の綴り方の違いを間違えた学生は他に2名いた。

学生 C の解答（抜粋）

Pn. Faridah, terimah kasih selama setahun. Kelas **awak** sangat menarik, jadi saya boleh belajar bahasa Melayu dengan seronok. [Pn.は Puan の省略表記]

ファリダ先生、1年間ありがとうございます。君の授業はとてもおもしろくて、私は楽しくマレー語を勉強できました。

学生 C は聞き手指示に二人称代名詞の一つである **awak**「君」を用いている。**awak** は対等か目下の人間に対して用いるもので、大学教員に対して用いるのは不適切である。代名詞 **awak** を用いた学生は他に1名いた。

標準マレー語の二人称代名詞には他に、**anda**、**kamu**、**engkau**、**kau** がある。これらを用いた学生はい

なかった。ちなみに、話し手指示は全員が一人称代名詞 *saya* 「私」を用いており、これは大学教員への手紙においては適切な選択である。標準マレー語の一人称代名詞には他に、*aku* 「僕、俺、あたし」がある。

このような結果になった背景を考えたい。まず、聞き手指示の表現について説明が与えられるのは、1年次の第2週である。例えば、文法の教科書 (野元 2020) には、以下のような記述がある。

awak、*kamu* は対等または目下の人物に対して用い、*anda* は相手を目の前にして使うことはまれです。初対面や目上の話し相手を指すには、代名詞でなく「人を呼ぶときのその他の表現」(§1.1.2) に挙げた様々な表現を用います。(p. 13)

マレー語では、親族名称や称号・職位を 2 人称の代名詞に相当する表現として用いることが普通に行われます。多くは後に名前を続け「～さん」という敬称としても用いられます。敬称として用いられる場合には、語頭が大文字になります。(p. 14)

ただし、例としては *Puan Faridah* 「ファリダさん／先生」、*Prof. Soda* 「左右田先生」のような敬称としての使用しか挙げられていない。これは人称代名詞が最初の文法事項であるために、文を用いた例が出せないことによる。また、野元 (2020) における聞き手指示表現は基本的には *awak* である。*puan* が登場するのは、第 25 課 (全体は 30 課ある) の *Puan ada bawa rokok?* 「タバコは持って来ていませんか？」という例文のみであった。

野元 (2020) に対応する会話の教材 (野元 & ファリダ 2020) には、代名詞代用表現としての *puan* の使用は一度もない。これは、この教材の会話がほぼすべて大学生の友人間でのくだけた会話であるためである。そこで使用される聞き手指示表現は *awak* 「君」のみになっている。その他に会話の授業で使っている教科書 (ファリダ & 山本 2016) では、後述のように、より多用な聞き手指示表現が用いられている。しかし、*puan* は一度も登場しないようである。

学生が *puan* を聞き手指示表現として用いる機会が最もありそうなのは、ファリダ先生と話す時である²。ファリダ先生が学生に対して用いる聞き手指示表現は、人称代名詞 *awak* または代名詞代用表現としての固有名詞のはずである。一方、学生がファリダ先生や他の母語話者教員に対して普段どのような聞き手指示表現を用いているのかは、今後客観的に調査する価値がある。

3. 既存のマレー語教材における話し手・聞き手指示表現

本節では、既存のマレー語教材、特に会話教材において話し手・聞き手指示表現がどのように扱われているかを整理する。時代により異なる傾向が見てとれるので、20 世紀と 21 世紀に分けて紹介する。

3.1. 20 世紀：文法を前提とする会話、*anda* の時代

3.1.1. Zaharah & Atmosmarto (1995) *Colloquial Malay* (初版)

このテキストは英語で書かれたマレー語の教科書で、文法事項に沿った構成になっている。まず Lesson 1 の Language points で人称代名詞の *saya* 「私」と *anda* 「あなた」が導入されている。その後の会話では基本的にこれらが話し手・聞き手指示表現として用いられる。

Lesson 2 では、会話の説明中で *Saying 'you' and 'yours' is almost avoided* と述べられ、固有名詞が代名詞代用表現として使われる会話が出ている。

² 1 年次のマレー語を担当する他の 2 名は男性。

Susan: **Annie** tak ada anak lelaki?

Annie: Tak. Anak saya semua perempuan.

スーザン: アニーは息子はいるの?

アニー: いないよ。私の子供はみんな女の子。

続く Lesson 3 では、Language points でくださった人称代名詞として、aku/ku「僕、俺、あたし」、kamu/mu「君」、engkau/kau「お前、あんた」が導入されている。これは恐らく、人称代名詞の接語形を導入するのと合わせた形にしたのではないかと思われる。Lesson 1 で導入した saya、anda はマレー語固有の人称代名詞ではなく、接語形が存在しない。くださった人称代名詞が実際に会話の中で用いられるのは Lesson 7 である。Lesson 7 では、Fatimah と Chong という二人の同僚の間での会話で、Fatimah が Chong を kau で指示している。逆に、Chong が Fatimah を指示するような文はない。Chong は自らを saya で指示している。Fatimah が自らを指示するような文はない。この課の別の会話では、友達同士が互いに kau を使い合っているものがある。これ以降、saya-kau の会話が増えるが、やはり saya-anda も並存し続ける。

Lesson 11 では、文法事項として受動文が導入される。それに伴い、受動文を使用することで、明示的な話し手・聞き手指示表現を出さないという方略が会話を通じて示される。下の引用では、話し手・聞き手指示表現が生起することが可能な位置を[]で示す。

Asmah: Sani, buku-buku cerita sudah dimasukkan [] ke dalam beg?

Sani: Sudah, Mak. Buku kerja sekolah juga sudah disimpan [] dalam beg.

アスマ: サニ、物語の本はもうかばんに入れた?

(直訳: ~ [あなたに] かばんに入れられた)

サニ: もう入れたよ、お母さん。学校のワークブックももうかばんに入れたよ。

(直訳: ~ [私に] かばんに入れられた)

話し手指示にくださった人称代名詞 aku「僕、俺、あたし」が初めて使われるのは Lesson 13 においてである。いずれも友達同士の間のくださった会話で、話し手が aku、聞き手が kau で指示される。

Lesson 14 では、固有名以外の変名詞代用表現が初めて登場する。下の会話では、聞き手である医者指示するのに Tuan Doktor「お医者様」という表現が用いられている。これは、dokter「医者」という普通名詞に敬称 tuan「~様」が付いたものである。

Bapak: Pada pendapat **Tuan Doktor**, penyakit ini boleh menjangkiti orang lain?

Doktor: Tidak!

父: 先生のお考えでは、この病気は他の人にうつる可能性はありますか?

医者: ありません!

固有名詞以外の変名詞代用表現はこの他には、Lesson 16 で kakak「姉」が用いられている。下の会話では、姉である Hasnah は自らを kakak「姉」で指示し、妹の Rozi は自らを固有名 Rozi で指示している。

Hasnah: **Kakak** mesti telefon pejabat untuk memberitahu mereka **kakak** terpaksa pulang. Apa sekali pun kata mereka, **kakak** akan pulang juga.

Rozi: **Rozi** akan telefon sekolah untuk memberitahu Mak sakit kuat. Sekarang pun **Rozi** boleh telefon Encik

Ismail di rumahnya.

ハスナ： 姉さんは帰らなきゃいけないと伝えるために職場に電話しなければなりません。何と言われようと、姉さんは帰ります。

ロズィ： 私は母さんが大変な病気だと伝えるために学校に電話します。私は今すぐにでも家にいるイスマイルさんに電話できます。

まとめると、話し手・聞き手指示表現は基本的には saya-anda で、くだけた会話では saya-kau または aku-kau が用いられている。代名詞代表表現も用いられているものの、それほど頻繁とは言えない。

3.1.2. シャイク・オマー&山崎 (1997) 『オマー・アズーのマレー語講座』

このテキストは日本語で書かれた初めての本格的な総合的なマレー語のテキストではないかと思われる。やはり文法事項に沿った構成になっている。

話し手・聞き手指示表現としては、第 1 課の会話で saya 「私」と anda 「あなた」が導入され、以降 saya-anda の会話が基本となる。その他に文法コーナーで敬称を基とする代名詞代用表現 cik (未婚女性)、puan (既婚女性)、encik (男性) が提示されている。

会話文中で代名詞代用表現が実際に用いられるのは第 3 課のホテルにおけるスタッフと客の間の会話である。スタッフが男性客を指示するのに encik を用いている。第 3 課ではくだけた人称代名詞 3 つと代名詞代用表現 8 つが新たに登場する。

- 人称代名詞
aku 「僕、俺、あたし」、awak 「君」、kamu 「君」、engkau 「お前」
- 代名詞代用表現
 - 主従関係を表す普通名詞
tuan 「主人」(「～様 (男性)」という敬称にもなっている)
 - 親族関係を表す普通名詞
saudara 「親戚、兄弟」、saudari 「親戚、姉妹 (女性)」、pak cik 「おじさん」、mak cik 「おばさん」、abang 「兄」、kakak 「姉」、adik 「弟、妹」

様々な話し手・聞き手指示表現の使用に関して、「外国人がマレー語を話す場合は、日常会話では親しい相手に対しても pak cik/mak cik, abang/kakak, adik を用いるのが無難」と述べて、指針を示している。二人称代名詞に関しても、「awak, kamu,engkau は個人差、地域差がある」と注意を促している。

とはいうものの、第 6 課では結婚式の招待の電話のやりとりの会話の中で、マレーシア人の Nasir と日本人の多賀が互いを anda 「あなた」で指示し合っていたりし、やはり saya-anda が基本と考えられているようである。以降、encik/cik/puan と anda を混ぜた会話が続く。

3.2. 21 世紀：より実際の会話、脱 anda の時代

20 世紀末から、マレー語教科書の中で基本となる二人称代名詞に変化が見られる。言語計画の中で英語の you に相当する中立的な代名詞となるべく作り出された anda は、実際には聞き手が不特定であることを符号化するようになった。それゆえ、特定の聞き手が目の前に存在する対面の会話での使用は不適切となる。20 世紀のマレー語教材では、実際の言語使用ではなく、規範上の理想が非母語話者の習得すべきマレー語として想定されていたと考えられる。20 世紀終わりになると、anda がマレー語教

科書の会話の中で登場することはほとんどなくなる³。二人称代名詞の変化と同様に、教科書の設計自体もより実際的な方向に向かう傾向が見られる。20 世紀には、体系的な文法項目の学習が前提となり、関連する文法項目を用いた会話が用意されていた。21 世紀には、マレー語教材はより機能主義的になり、まず会話があり、文法はその中で出てきた項目を個別につまんでいくような補助的位置付けになる傾向がある。

3.2.1. ファリダ & 近藤 (1999) 『エクスプレス マレー語』⁴

このテキストは文法事項に沿った構成である。第 1 課で人称代名詞と代名詞代用表現を「人称代名詞」として提示している。二人称代名詞として **anda** は登場すらしない。話し手指示には一貫して **saya** が用いられている。会話はマレーシアに赴任する佐藤夫婦が現地の人々と職場や店などで行うという設定になっている。

聞き手指示表現が会話中に初めて登場するのは第 2 課で、敬称 **encik** 「～さん (男性)」が代名詞代用表現として用いられている。

Sila tulis nama, alamat dan nombor telefon **encik** di sini.

ここに**お客様**のお名前、住所、電話番号を書いて下さい。

第 3 課では敬称+固有名の **Encik Sato** 「佐藤さん (男性)」が代名詞代用表現として用いられている。

Staf hotel: Ini beg **Encik Satokah**?

ホテルのスタッフ: これは**佐藤さん**のかばんですか?

その後は基本的にこのような敬称+固有名が聞き手指示表現として用いられている。第 10 課では、レストランでウェイトレスが佐藤さんに対して、**abang** 「兄」という代名詞代用表現を用いている。下のセリフの 2 文目では **pro** 脱落も用いられている。

Pelayan restoran: Pandai sungguh **abang** berbahasa Melayu.

[] Belajar dengan siapa?

レストランのウェイトレス: **お客様**はマレー語が本当にうまいですね。

[あなたは] 誰に習ったんですか?

第 12 課では **cikgu** 「先生」が代名詞代用表現として用いられている。

Puan Sato: Saya hendak meminjamkan video bahasa Jepun ini kepada anak-anak **cikgu**.

佐藤さん: **先生**のお子さんたちにこの日本語のビデオを貸してあげます。

初めて会話文中に二人称の人称代名詞が登場するのは第 13 課で、**awak** 「君」が用いられている。下のセリフは佐藤さんが職場の部下と思われる **Cik Noni** 「ノニさん」に向けて言うものである。

³ マレーシアで出版される教科書には一部いまだに **anda** を使うものもある (Robiah 2009 など)。

⁴ 続編であるファリダ & 近藤 (2010, 2019) 『ニューエクスプレス (プラス) マレー語』は初級者向けではなく、中級～上級者向けであるので取り上げないが、話し手・聞き手指示表現については本節の内容と基本的には変わらない。

Encik Sato: Nasib baik **awak** mengingatkan saya.
佐藤さん: 君が思い出させてくれてよかったよ。

興味深いことに二人称代名詞が会話文中で用いられるのはこの一度だけである。おそらくこれは、会話の主人公である佐藤夫妻がある程度の年齢に達しており、さらに駐在員であることから、現地人との間に若干の距離があるからだろう。

3.2.2. Zaharah (2012) *Colloquial Malay* (第2版)

このテキストは上で取り上げた Zaharah & Atmosmarto (1996)の第2版という体裁にはなっているが、その中身は全く別物になっている。まず、初版の文法に沿った会話を改め、機能・場面別の会話による構成になっている。練習問題も初版では文法の練習問題が中心であったのに対し、第2版では学習者が自らセリフを考えるような、会話の練習問題が中心に変わっている。さらに、挿絵や写真もふんだんに盛り込まれ、より現代的な語学教材に仕上がっている。

話し手・聞き手指示表現は、まず Unit 1 の Language point で人称代名詞を導入している。話し手指示には saya「私」と aku「僕、俺、あたし」、聞き手指示には anda「あなた」、kamu「君」、awak「君」、engkau「お前」、kau「お前」を提示している。これらの使い分けは Culture points の中で説明している。二人称代名詞の選択に関しては、依然として anda の使用を勧めている: it is best to use *anda*, especially when you are speaking to a person whose status you do not know. Unit 1 の最初の会話では実際に anda が用いられている。

Badrul: **Anda** dari England?

Sarah: Ya, saya dari England. Saya orang Inggeris.

バドルル: あなたはイギリスから来ましたか?

サラ: はい、私はイギリスから来ました。私はイギリス人です。

しかしながら、Unit 2 以降では anda は会話文中に全く登場しなくなり、代わりに awak と kamu が用いられている。この点が初版と大きく異なり、明らかに脱 anda の姿勢が見てとれる。

代名詞代用表現については、初版と同様であるが、Unit 1 の段階でかなりの種類を取り上げている点で変化が見られる。以下はマリアと彼女の母との会話である。

Maria to her mother: Mak, **Maria** nak makan.

Mother to Maria: **Maria** nak makan apa? **Mak** masak kari.

マリアから母へ: お母さん、**私**、ご飯食べたい。

母からマリアへ: **マリア**は何が食べたいの? **お母さん**はカレーを作るけど。

ここでは、マリアは自らを固有名 Maria で指示し、母も聞き手であるマリアを Maria で指示している。母は自らを mak「お母さん」という代名詞代用表現で指示している。著者は、このような親族名称の代名詞代用表現としての使用を、文化に関連付け、Culture points のコーナーで Malaysian society is one that readily 'adopts' other people と述べている。そのようなことが実証的な裏付けを得られるかは定かでないが、少なくとも親族名称の代名詞代用表現としての使用の存在を学習者の記憶にとどめるのには効果的であろう。Unit 1 では、さらに練習問題を通して、代名詞代用表現（と呼びかけ表現）の定着を図って

いる。

Exercise 4 (抜粋)

How would each person address the other?

1. a child speaking to an elderly woman at a fruit stall
2. a woman speaking to a gentleman at a post-office counter

3.2.3. ファリダ & 山本 (2016) 『Jom Belajar Bahasa Melayu』

このテキストも会話を中心としており、文法事項の学習を前提とし、それに沿うような会話文にはなっていない。話し手・聞き手指示表現は、上述のファリダ・近藤 (1999) と同様である。その理由は筆頭著者が同一ということもあろうが、会話文の設定がほぼ同じということが主たる理由であろう。駐在員の田中さんがマレーシアに赴任してから帰国するまでの現地人とのやりとりにより各課の会話が作られている。その中には、友達同士のような対等の関係はなく、会話の相手との間にはいつも社会的・心理的な距離がいくらかある。

話し手の指示には一貫して一人称代名詞の *saya* 「私」が用いられる。聞き手の指示は代名詞代用表現が中心で、二人称代名詞の *anda* は一切用いられず、人称代名詞は第 13 課で代名詞 *awak* 「君」が一度登場するだけである。*awak* は、医者が田中さんに対して用いている。

Doktor: Aaa....., kenapa muka **awak** nampak pucat benar ini?

医者: う〜ん……、どうして**君**はそんなに青ざめたような顔なのかな?

以下は、第 5 課の会話における代名詞代用表現の使用例である。

Encik Honda: **Kak Timah** balik ke kampungkah?

Kak Timah: Ya, **kakak** balik kampung.

本田さん: **ティマさん**は帰省するんですか?

ティマさん: はい、**私**、帰省するんです。

本田さんは聞き手のティマさんを敬称+固有名の **Kak Timah** で指示している。**kak** は年上の女性に親しみを込めて用いる敬称で、普通名詞 **kakak** 「姉」に由来する。ティマさんは自らをこの **kakak** で指示している。

4. 結び

本稿では、マレー語教材における話し手・聞き手指示の表現について見てきた。話し手の指示には教科書間で揺れは見られず、人称代名詞 *saya* 「私」が基本となっている。一方、聞き手の指示に関しては、教科書により立場が異なる。人称代名詞と代名詞代用表現のどちらも用いるという点では、どの教材も共通している。一方、人称代名詞をどの程度用いるか、どの人称代名詞を用いるかでは教材により違いが見られた。20 世紀には *anda* 「あなた」が中心であったが、21 世紀には *anda* はほぼなくなり、*awak* 「君」や *kamu* 「君」が主流となった。これらの二人称代名詞は対等または目下の人物に対して用いるものなので、会話文の参加者がそのような関係にない場合には不適切となる。従って、会話文の状況設定により、二人称代名詞の頻度が変わってくる。

以上を踏まえて、筆者はマレー語会話教材では以下のような点に留意する必要があると考える。

1. 聞き手指示表現は数が多く、その選択条件も複雑なので、何度かに分けて提示し、かつ繰り返し学習できるようにする。
2. 適切な話し手・聞き手指示表現は会話の参与者により異なるので、会話文は学習者の目的に合わせ、できるだけ多様でありながら、過多にならない程度の、様々な状況のものを示す。

参考文献

- ファリダ・モハメッド, 近藤由美. 1999. 『エクスプレス マレー語』 白水社.
- ファリダ・モハメッド, 近藤由美. 2010. 『ニューエクスプレス マレー語』 白水社.
- ファリダ・モハメッド, 近藤由美. 2019. 『ニューエクスプレスプラス マレー語』 白水社.
- ファリダ・モハメッド, 山本佐永. 2016. 『Jom Belajar Bahasa Melayu マレー語を勉強しよう 会話中心』 Penerbit Universiti Sains Islam Malaysia.
- Helmbrecht, Johannes. 2013. Politeness distinctions in pronouns. In Dryer, Matthew S. & Haspelmath, Martin (eds.) *The World Atlas of Language Structures Online*. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. (Available online at <http://wals.info/chapter/45>, アクセス日: 2021年1月16日.)
- 野元裕樹. 2020. 『マレー語の教科書 詳解文法』 Next Publishing Authors Press.
- 野元裕樹, ファリダ・モハメッド. 2020. 『Bahasa Melayu TUFSS』 東京外国語大学.
- 野元裕樹, スニサー ウィッタヤーパンヤーノン (齋藤), 岡野 賢二, トウザライン, 南 潤珍, スリ・ブデ イ・レスタリ. 「代名詞代用・呼びかけ表現研究の現状—タイ語, ビルマ語, マレー語, インドネシア語, ジャワ語, 朝鮮語—」 『語学研究所論集』 25.
- Robiah K. Hamzah. 2009. *Bahasa Melayu Perniagaan untuk Penutur Asing*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.
- シャイク・オマー・モハメッド, 山崎あずさ. 1997. 『オマー・アズーのマレー語講座』 めこん.
- Zaharah Othman. 2012. *Colloquial Malay: The Complete Course for Beginners*. London: Routledge, 第2版.
- Zaharah Othman & Sutanto Atmosmarto. 1995. *Colloquial Malay: The Complete Course for Beginners*. London: Routledge, 初版.

執筆者連絡先: nomoto@tufs.ac.jp

本稿は科学研究費助成事業基盤研究 (B) 「アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮した CEFR 能力記述方法の開発研究」 (2018 年度-2020 年度、研究代表者 富盛伸夫、研究課題/領域番号 18H00686) の研究成果のひとつとして公開するものである。